

## 放送英語の通訳プロセス—異文化コミュニケーションの現場から I

小倉慶郎 (近畿大学)

本シンポジウムのテーマは、「日英両言語間における異文化コミュニケーションの問題をめぐって」である。しかし、問題提起の前に、放送ジャーナリズムにおいてはまだ歴史の浅い、「放送通訳」(特にNHK BS)の現場ではどのようなことが行われているのかを概観しなければならない。その上で、放送通訳における問題点を、簡単に指摘したい。

### 1 放送通訳大国、日本

日本は翻訳大国である、とは多くの論者が指摘する事であり、事実から見ても正しい。欧米の主要な文学書、各分野の主要な文献は言うまでもなく、毎週続々と出版される欧米の新刊書までも、次から次へと日本語へ翻訳され、本屋の店頭に並んでいく。古くは、漢文を通じた中国文化の摂取に端を発する、日本人のこの翻訳への信仰は、英語に堪能でない国民が、欧米文化と伍する教養、知識を身につけるのに大きく貢献したことは疑いの余地がない。これは、日本以外のアジアの国々の現状を見れば納得できるはずである。

さて、一種の「舶来上等」とも言える、日本人のこの性向は、文字の翻訳にとどまらなかったようだ。外国のTVニュースの摂取に際しても、恐らくは世界でも例を見ないようなやり方で、定時に放送される、主要な欧米ニュースの通訳を始めたのである。

現在では、NHK BSをはじめ、CSではBBC World, CNN International (JCTV), Fox Newsなどで、日本語による通訳が行われ、日本は「放送通訳大国」と言っても、いさかも差し支えない状態になっている。

例えば、NHK BSでは、英・仏・独・露・西・中・韓・越の8カ国の定時ニュースに、ほぼ毎日日本語の通訳がつく。ウィークデイには、毎日50人前後の通訳者が活躍していると言う。

欧米では、「放送通訳」と言えば大統領選、米露の宇宙開発など、重要イベントで使われる同時通訳を指す。一方、日本の放送通訳は質・量ともに圧倒的に他国を引き離しているだけではなく、訳の正確さとスピードの要求が、恐らく日本だけに見られる、極めてユニークな通訳形態を発展させることとなった。この通訳形態を「時差通訳」と呼ぶ。この通訳法は、通訳者に、通訳者・翻訳者・editor・アナウンサーの一人4役を要求する、極めて独特な通訳形態で、NHK BSにおいては、この時差通訳が主役となっている。

### 2 時差通訳の形式

NHK BSの「おはよう朝のトップニュース」などを見ると、画面に「通訳者…」と表示されることがあるが、これは、このニュースを時差通訳しているという表示である(ちなみに、同時通訳であれば、「同時通訳…」と表示される)。

一般の通訳で使われる、逐次通訳、同時通訳と時差通訳を **original** の言語が流れてから、**interpretation** までの時間に着目して整理すると、次のようになる。

図（水野的氏の図を改変したもの）

- ・逐次通訳（consecutive interpretation）

original \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ interpretation

- ・同時通訳(simultaneous interpretation)

original \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ interpretation

- ・時差通訳(prepared interpretation)

original \_\_\_\_\_

..... interpretation(voice over)

原稿・メモ作り

オン・エア

上の図から分かるとおり、時差通訳では、準備作業として、「耳を使った翻訳」に近い作業を行う。もちろん時間をかければ良い翻訳ができるはずであるが、NHKでは、正確さに加えて、ニュースの速報性も重視しているため、通訳者は、限られた時間で作った、走り書きのようなメモをもとにボイス・オーバーをしなければならない。例えば、NHK BSで朝9時半に放送されるABC World News Tonightの場合、20分強の放送を3人で分担し、約1時間かけて準備（冬時間の場合）。また、正午放送のCNN Headline Newsでは、午後11時半に入ってくる15分のニュースを3人で分担し、30分で準備している。しかも、視聴者は、通訳者とアナウンサーを区別しないため、時差通訳者にはアナウンサー並みのdeliveryも要求される。かくして、時差通訳者は、通常の通訳能力の他に、限られた時間内での翻訳、編集能力、さらにアナウンサーとしての力量まで要求されるのである。

### 3 NHK BSの時差通訳における制約、問題点

NHKの放送として、日本語の通訳が流れる以上、通訳者もNHKの決まりに従わなくてはならない。ニュースの始めで、originalで「南北首脳会談が始まりました」と言っても、通訳では「韓国と北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国の間で首脳会談が始まりました。」と言わなくてはならない（2回目からは南北首脳会談でよい）。また、同音異義語、紛らわしい言い方は避ける（約50人→50人ほど、米国→アメリカ）、登録商標、特定の商品名は原則として一般名称で言う（ゼロテープ→ゼロハンテープ、マクドナルド→ハンバーガーショップ）など多くの規制に、通訳者は最初は面食らうようだ。

しかし、それよりも、異文化コミュニケーションの観点から問題となるのは、弾丸のように話されるニュースを全部訳出できないということである。聞きやすいアナウンサーの読みは、1分間に465～440拍程度とされており、情報を最大限維持しながら、早口にならないよう、いかに訳出量を減らすかが放送通訳者の第1の課題である。また、当然のことながら、視聴者として自国の国民を想定している欧米のニュースには、日本の視聴者には馴染みのない、用語・表現が頻出する。通訳者がこのような問題点をいかに克服しているかについては、JASEC BULLETIN 第9巻（本号）に掲載予定の「放送通訳の訳出ストラテジー」（小倉、三島）をご参照頂きたい。